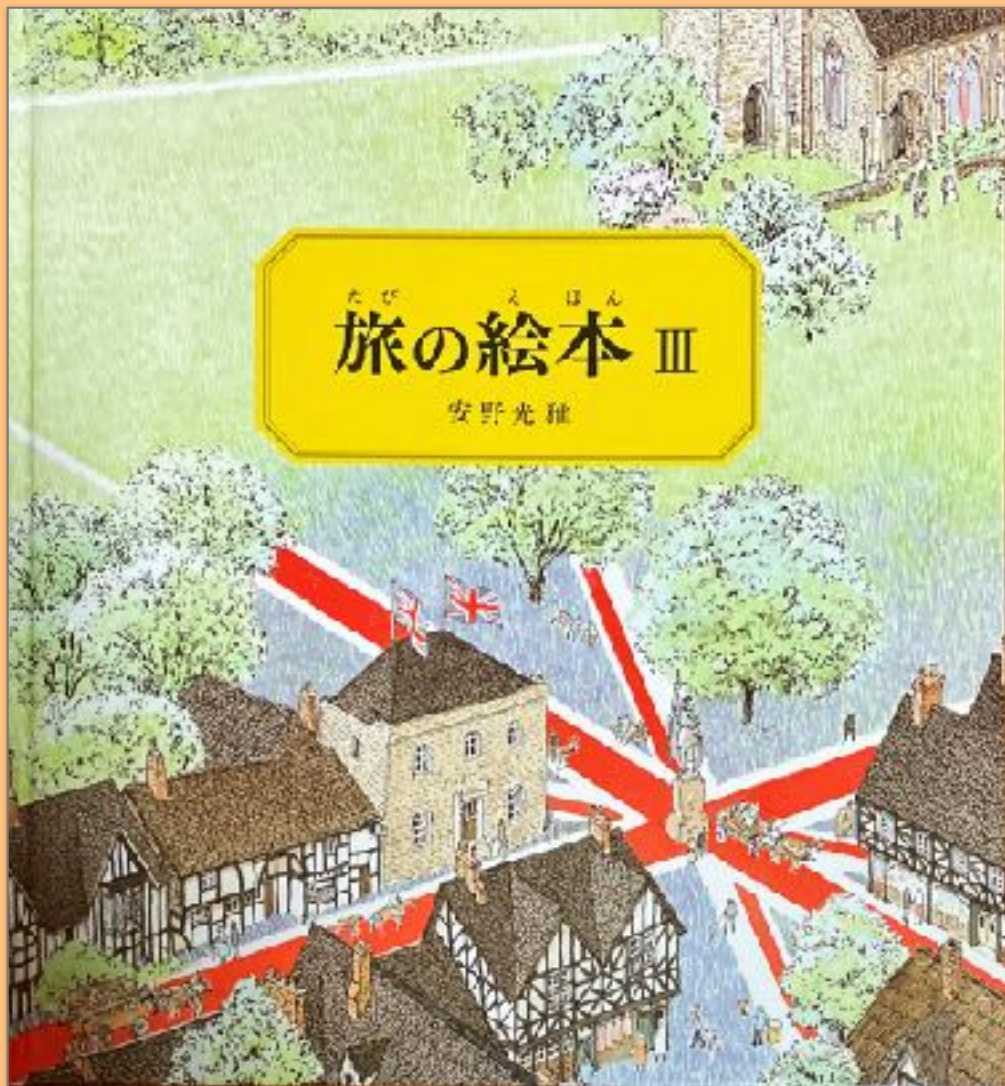


# 旅の絵本Ⅲイギリス編を楽しむ本



伊藤 明

## ■ 初めに

この本は安野光雅著の旅の絵本を楽しむための本です。

旅の絵本は、著者が世界各国を巡り、そこで暮らす人々の生活や行事、そしてその地域の街並みや自然を克明繊細な筆致で、描かれています。さらに、すみずみまで細かく描きこまれた中には、おとぎ話の主人公や、有名な絵画へのオマージュも入っています。解説の部部には、著者の印象に残った事柄や歴史文化についても書かれ時間を忘れて楽しめる、旅する喜びが凝縮された1冊です。

ところが、絵本を見ながら解説を読もうとすると場面と解説ページを行ったり来たりすることになります。なんだか忙しいので何か良い方法はないか考えました。

そこで、場面の解説部分を別冊にすることにしました。また、解説だけでなくその場面の絵の部分を切り取って入れました。さらに、解説の中で紹介される人物や建物などについて、私が調べたことを補足文として追記しました。

お一人でもお子様と一緒に、「旅の絵本」と「楽しむ本」を開いて各場面を隅々まで楽しんでいただけたら幸いです。

2021年6月21日

伊藤 明

## ■ 表紙 教会と大王

銅像は、ウィンチェスターに建っている、アルフレッド大王です。このあたりに見える木組みの建物は、ストラトフォード・アポン・エイボンの町で取材したものです。イギリスにはこういう家がたくさんあります。

右上の教会は、ヨークのセントデニーズ教会をモデルにしました。

アルフレッド大王は在位:871年 - 899年)

は、イングランド七王国のウェセックス王です。兄エゼルレッド王の死後、王位を継ぎました。約100年続いた北欧ヴァイキン

グの侵攻を食い止め衰退したイングランドのキリスト教文化を復興し古英語での読み書きを習慣化した王として知られます。アングロ・サクソン時代最大の王とも称せられイギリスの歴史において大王と称される君主です。また、海上で敵を迎え撃ち、上陸を阻止するための海軍力を使った初めての君主として、しばしば英国海軍の父と称されるそうです。



## ■ 前後扉 結婚式パレード

前の扉のページから後ろの扉まで、結婚式のパレードが続いています。これはチャールズ皇太子とダイアナ妃の結婚式で、ちょうどこの絵



本を描いたときに行われたので記念に描いたものです。後にお二人は離婚され、ダイアナ妃は惜しいことにパリで不慮の事故で亡くなりました。だからこの絵は消してもいいのですが、それは歴史ですから残しました。

この後にもチャールズ皇太子とダイアナ妃が登場します。この二人に対する思い入れを感じます。

## ■ 場面1 ドーバー海峡



ドーバー海峡の白い崖です。地殻変動の時代にイギリスはヨーロッパ大陸から離れていったと言われています。対岸に当たるフランスのエトルタ海岸のあたりは全く同じ白い層があって、いかにも一つのパンを二つに割ったようになっています。

対岸のフランスまでチョーク (*chalk*) と呼ばれる白い層が続きます。白い未固結の石灰岩でできた厚い地層で、円石藻の化石からできています。日本語では白亜といい白亜紀の語源となっています。他に黒板に使うチョーク（白墨）の語源にもなっています。ドーバーを渡って一人の旅人が船でやってきました。著者かもしれません。



## ■ 場面2 漁村



雨が降っています。一般にイギリスは雨が多い、と言われています。イギリス紳士は傘を持って歩きますが、少しの雨ならささないで濡れていきます。コウモリ傘をまた元通りに、ステッキのようにたたむのは面倒なので傘屋さんに出すのだということ

ことです。雨に対する感覚はイギリスやフランスでは日本とはずいぶんちがっていて、雨が降ってきても洗濯物を慌ててとりいれるということではなく、濡れても平気でいるのです。木の下で休んでいるのが旅人です。そばにピーターパンと妖精が来ています。

入江に船がついています。村の人たち？が船を引き上げています。乗ってきた旅人はさっきの木のところで休んでいます。





### ■ 場面3 ニュートンとケント地方の農家

右ページの上の小屋はピーターパンの小屋です。そのずーっと下で、休んでいる人の前にリンゴが落ちています。

リンゴが落ちたのを見て引力を発見したといわれているニュートンは、イギリスの誇る世界的な物理学者です。わたしも偶然にバイベリーのマナーハウスの裏庭で、リンゴが落ちるのを見ました。軽くバウンドして草の中にかくれました。



右のページの帽子をかぶったような塔は、サイロで、風の方角によって帽子が動き、空気が入りやすく工夫されています。イギリスのケント地方の農家です。



塔のある家はオーストハウスです。ホップ窯のために設計された建物です。ホップを乾燥させるために長方形の1階または2階建ての建物で複数の窯でホップは下の薪または木炭の火から上昇する熱風によって乾燥させます。その熱風を逃がすために風によって向きを変えられるカウル（三角の屋根）が乗っています。ここで畑から採れたてのホップをかき集めて乾かして冷ましてから

袋に入れて醸造所に送りました。もちろんホップはビールを作るための材料です。

横にジャックと豆の木が描かれています。旅人はここで馬を借りています。



## ■ 場面4 ストーンヘンジ

右上はストーンヘンジで、誰も知らないほど大昔の  
人が大きな石を積んだ遺跡です。

中ほどの下のあたりに、ちょっと改まった衣装を着て  
いる人たちがいます。これはウェルズ地方の民族衣  
装です。その前に、お菓子を売っているおばあさん、

ちょっと右に豚にのった少年がいます。

そのどちらも、「マザーグース」とい

う、イギリスの伝統的な子どもの歌の本

から描いたものです。といっても、それを描いているわたし  
には、「描けた」という気がしないのです。

でもイギリス人は一目見ただけで「これはマザーグース

の何々だ」とすぐにわかるのでした。それは、子どもの

ころから体に染みこんでいる文化で、大切なこと

なんだと、とても感じ入りました。この本に

は、このほかにもたくさん「マザーグース」か  
らの絵が描いてあります。

中ほどの高床式の小屋は、鼠が入らないよう  
に工夫された穀物の倉です。フランスやイギリ  
スでよく見かけます。日本にもねずみ返しはあ  
ります。よく見てください。天井を遣うことの  
できない鼠は退散します。では猫はどうでしょ  
う。猫に来られなくする方法は、わたしは、ま  
だわかりません。

ストーンヘンジは、ロンドンから西に約200kmのイギリス南部・ソー  
ルズベリーから北西に位置する環状列石（ストーンサークル）のことで  
す。世界文化遺産として1986年に登録されました。

マザーグースは、イギリスで古くから口誦によって  
伝承されてきた童謡や歌謡の総称で通称です。元来は  
「マザーグースの歌」といいます。子どものための伝  
承歌謡で1760年ころジョン・ニューベリーが《がちよ  
うおばさんの歌》を出し以後、伝承童謡がよくこの  
名で呼ばれるようになりました。遊び歌や数え歌、早  
口ことばなどです。有名な歌として「ロンドン橋落ち

た」「きらきら星」「ABCの歌」「三匹の子豚」などがあります。

旅人は、村に入るところです。



## ■ 場面5 ピーターラビットの村



左ページの上のあたりで、壺のように見えるものをつついている女の人は、バターをつくっているのです。

右下に小さく描いてあるのは、ヘッジホッグとよばれている、ハリネズミです。よく車にひかれているのを見たものでしたが、このごろはあまり見なくなりました。数が減ったのでしょうか。



このほか、イギリスの田舎では、兎とか雉の夫婦をよく見かけるし、捕ろうと思えばすぐとれますが、それはかれ等が人間を警戒していないからでしょう。

わたしは田舎の喫茶店で目の前にある砂糖壺に砂糖の粉を貰いに往復する雀にあいました。さすが、ビアトリクス・ポッターの国です。



ヘレン・ビアトリクス・ポッター

(英: 1866年7月28日 - 1943年12月22日)



ピーターラビットの生みの親として知られるイギリスの絵本作家です。ヴィクトリア時代にロンドンの裕福で厳格な家庭に育ちます。少女時代から田園を愛し、小動物の観察やスケッチに没頭したそうです。

絵本作家としての原点は、1902年に出版された『ピーターラビットのおはなし』で、これは作者がかつての家庭教師の幼い息子、ノエル・ムーアに出した絵手紙を本にして出版するために書き直したものです。

創作活動の期間は十数年でしたがピーターラビットの絵本シリーズは児童文学の古典として、世界各国で親しまれています。彼女の自然に対する情熱は、「ピーターラビットの絵本」シリーズの創作に色濃く反映されています。後半生イングランド湖水地方に住み羊の飼育と自然保護活動に力を注いだそうです。



★湖水地方

イングランド北西部カンブリア郡に位置する地域の名称です。

## ■ 場面6 グリニッジ天文台



右ページ上の建物はグリニッジ天文台です。そこから一本の線が出ていますが、これは経度0の線なのです。

その左下の建物は、ストラトフォード・アポン・エイボンのシェークスピアの生家です。今も補修しながら残されています。さらにその左下の家はシェークスピアの恋人だったといわれている、アン・ハサウェーの家です。



左の高い柱はメイポールといって、メイ・デーにたてて、そのまわりで踊るのです。長いリボンをもって他の人と交錯しながら踊るので、ポールにはきれいな模様が編まれていきま



す。

まん中の塔の上の像は「幸福の王子」です。町の辻では日本と同じセッセッセのあそびをしています。



ハサウェイとシェイクスピアは1582年11月に結婚した。と書かれています。

メイデーは古代ローマの祭に由来する祭です。5月1日に豊穡の女神マイアを祀り供物が捧げられ夏の豊穡を予祝すると考えられています。現在では、ヨーロッパ各地でキリスト教伝来以前にさかのぼる起源をもち春の訪れを祝う日として定着しているそうです。その日にたてらるメイポール（五月の柱）を森から切り出して飾り、その下を人々が踊りまわります。病気や悪霊を逃れるために、生命と春の象徴である樹木を立てたのがそもそもの起こりでモミや白樺が主に用いられるそうです。



## ■ 場面7 マザーグース

左手には、馬車や樽をつくっている人たちが見えます。はたけにはキャベツ、その横には大きなカボチャなど、ケイト・グリーンナウェイの作品やマザーグースの歌をもとにして描いた絵があります。



ケイト・グリーンナウェイ

(英 184年3月17日-1901年11月6日)は、イギリスの挿絵画家で絵本作家です。子供を『小さな大人』として扱いがちだった19世紀に子供を『子供』として絵描いた数少ない画家の一人でグリーンナウェイの絵は、当時の子供服のデザインに影響を与えたそうです。キャベツ畑は絵本「窓の下で」（ゴブリンはキャベツを盗みます）の一場面のようなのです。



大きなカボチャから顔を出している絵はマザーグースの歌「かぼちゃ好きのピーター」で奥さんを住ませたカボチャのようです。

右下の学校は、ウェールズで見た小学校です。みどりのドアの家は湖水地方のニア・ソーリーというところにある、有名な絵本画家ビアトリクス・ポターの住んだ家です。

まん中の家は、そのポターの研究家で、この本「旅の絵本」シリーズをイギリスで出版した編集者の、ジュディ・テイラーの家です。コッツウォルズというところにありましたが、今は引越しました。彼女は、自分の家を空から見たのは初めてだと言っていました。黒い犬もそこで飼われていた牧羊犬です。



ジュディ・テイラー

英国の南ウェールズのガウアー生まれ。1981年より、フレデリック・ウォーン社の〈ビアトリクス・ポター・コンサルタント〉に就任。児童書の編集者として30年のキャリアを持ち1986年、手紙、日記、写真など多数の新資料を盛った画期的なポター伝を刊行。

## ■ 場面8 有名人の別荘と家



上に三軒の家があります。左が、ウィリアム・モリスが別荘にしていたケルムスコットの家です。まん中是有名なイラストレーターのアーサー・ラッカムの家、右は有名な絵本作家のケイト・グリナウェイの家です。門の前にいるのは、ケイト・グリナウェイと子たちというつもりです。



HOKEY POKEYという字が読めるのは、大道で売っていたアイスクリーム屋さんです。下の方には、田舎をまわる何でも屋さん。小さいデパートみたいなもので、むかしはこんなお店もありました。日本にもありました。

ウィリアム・モリス

(英 1834年 - 1896年) は、19世紀イギリスの詩人、デザイナーなど多方面で精力的に活動し、それぞれの分野で大きな業績を挙げました。「モダンデザインの父」と呼ばれています。架空の中世的世界を舞台にした『世界のかなたの森』など多くのロマンスを創作しています。

アーサー・ラッカム

(英 1867年9月19日 - 1939年9月6日) は、イギリスの挿絵画家です。『グリム童話集』『ガリバー旅行記』(1900年)、『リップ・ヴァン・ウィンクル』

(1905年)『ピーターパン・イン・ケンジントン・ガーデンズ』(1906年)、『不思議の国のアリス』

(1907年)などの児童向けの作品がよく知られています。『イギリス妖精物語(『ジャックと豆の木』)』(1918年)より



## ■ 場面9 家畜の品評会とABCの本



家畜の品評会です。育てた自慢の家畜を持ってきて品評会のはじまりです。これは年に一度のお祭りのようなところがあって運動会や市場やあてものの店などがでてにぎわいます。

わたしが描いた「ABCの本」を見ている子があるのですが、わかるでしょうか。

### ABCの本

へそまがりのアルファベット木片でできた、不思議なアルファベットが描かれています。よく見ると、おかしい具合にねじれていたり実際にはありえない構造だったり、まるでだまし絵のようです。対になるページには、その文字ではじまるものが、ウィットとユーモアで味つけされて描かれています。さらに、それぞれのアルファベットと絵を額縁のように囲っている、線画の中にも秘密がたくさん絵本です。

旅人は街中を悠然と歩いています。



## ■ 場面10 カンタベリー大聖堂

イギリスのカンタベリーにある有名な大聖堂です。中ほどに馬に乗った一団がありますが、これはイギリスの詩人チョーサーの書き残した有名な「カンタベリー物語」に出てくる巡礼団で、古い絵を資料にしたものです。





二階建ての乗合馬車があります、今でも、馬がエンジンに変わって二階建ての乗り合いバスがあります。二階は見晴らしがよいので観光客には人気があります。

カンタベリー大聖堂はイングランド南東部ケンタッキー州のカンタベリーにあります。約1400年の歴史を誇る英国国教会の総本山の大聖堂で1070年から1089年の間に建てられたイギリス初のゴシック様式建築で二重内陣式大聖堂です。



## ■ 場面11 ロンドン橋ロンドン塔



ロンドン橋が落ちたといって大騒ぎをしているところです。ハンプティダンプティのタマゴや、たらいの船など、「マザーグース」の中にあるものが描いてあります。

もっとも、むかしのロンドン橋は、橋の上両側にお店ができていて、一つの名物だったのですが、火事で本当に落ちてしまったというはなしです。その後架けかえられて今に至っていますが、その本物はアメリカが買って、アメリカのどこかに置いてあるそうです。



右はロンドン塔です。

ここは、かつては牢獄になっていて、今は見物できますが、むかしは拷問や処刑など怖い話がたくさんありました。よく見ると首切り役人もいます。川の上を船で連れて行かれる人はトーマス・



モア卿です。このほか、このロンドン塔には、ヘンリー八世の王妃アンとか、後の女王エリザベス一世など、いろんな人が入れられました。





「倫敦塔」は夏目漱石の初期の作品です。ひまがあったら、ぜひ読んでほしいおもしろい作品です。

手前はタワーブリッジです。この橋は塔から登って渡れるようになっていて、観光客が渡れるようになっています。廊下から、窓の外を見ることができますが、あしもとに深い溝ができていて、そこにはサングラスがきつと今も落ちたままになっていると思います。拾ったひとにお礼をします。あれはわたしの眼鏡なんです。



ハンプティ・ダンプティは英語圏においては非常にポピュラーな存在であり、『鏡の国のアリス』のほかに多くの文学作品でキャラクターとして登場したりしています。

## ■ 場面12 ウェストミンスターの鐘

大きい時計塔は英国国会議事堂のシンボルです。この鐘のメロディはあちこちでまねかれて、日本でもよく耳にすることがあります。

パレードの前を行く一団はスコットランドのバグパイプの楽団です。ピーターパンもいます。これは、ロンドンの公園にある銅像から抜けだしてきたという思い入れです。正面の木骨模様の大きい建物はロンドンのデパートです。



ピーター・パンは、イギリス・スコットランドの作家ジェームス・マシュー・バリーの戯曲『ピーター・パン：大人にならない少年』小説『ピーター・パンとウェンディ』からなる作品でピーターパンがロンドンのケンジントン公園で乳母車から落ちたところをベビーシッターに見つけられず迷子となったことから年を取らなくなり、海賊のフック船長やインディアンのタイガーリリーが住む異世界・ネヴァー・ネヴァー・ランド（ネバーランド）に移り住み妖精・ティンカーベルと共に冒険の日々を送るお話です。



## ■ 場面13 セントポール寺院



左はセントポール寺院です。右手の噴水はロンドンの目抜き通り、ピカデリーサーカスにあるもので、愛のいたずら天使キューピッド(エロス)がいます。屋台のお店がでています。

このキューピッドの羽のすぐ上に描かれている子どもは、子どもの人形を置いてその前に空き缶を置いて、お金を入れてもらおうと思っ

ているらしいのです。この絵ではそうは見えませんが、ほんとうにそんなおかしいことをしている子がいたので描きました。その右に、後ろに手を組んでいるのはイギリスの警官です。その右上は二階建ての観光馬車です。



ピカデリー・サーカスは、ロンドンの中心部シティ・オブ・ウェストミンスター（ウェストミンスター区）、ウエスト・エンドにある広場の名称です。（「サーカス」は「通りの合流点における円形の空き地」という意味）

## ■ 場面14 トラファルガー広場



ロンドンのトラファルガー広場です。高い塔の上にたっているのはネルソン提督です。1805年のトラファルガーの海戦でスペインとフランスの連合艦隊を撃破して、ナポレオンのイギリス侵略を撃退した国民的な英雄です。亡くなったときは国葬として先に描いたセントポール寺院に葬られました。



この塔の下、右には、刑事コロンボと、シャーロック・ホームズが描いてあります。また塔の下、左の二人は、今は亡きダイアナ王妃が結婚されるとき、誰知らぬものもないほど流布された、二人が写っている写真をもとにしています。



上の似顔絵は、左から、ビクトリア女王、ヘンリー八世、アン女王、シェークスピア、バートランド・ラッセル、ニュートン、チャーチルです。  
この場面は、人物が多く登場しています。チャールズ王子とダイアナ妃は二度目の登場です。

## ■ 場面15 ウインザー城



ウインザー城です。右端はリア王、塔の上にはハムレット、左下の屋上にはベニスの商人、塀の外にはマクベスの「森が動く」場面が描いています。

イギリス人は「たとえ英国は滅びることがあっても、シェークスピアは滅びない」というそうです。

この場面は、シェークスピアの小説や戯曲の主人公や場面が描かれています。

ウィリアム・シェイクスピアは、イングランドの劇作家、詩人であり、イギリス・ルネサンス演劇を代表する人物です。1613年ごろに引退する

までの約20年間に、四大悲劇『ハムレット』『マクベス』『オセロ』

『リア王』をはじめ、『ロミオとジュリエット』『ヴェニスの商人』『夏の夜の夢』『ジュリアス・シーザー』など多くの傑作を残しました。

## ■ 場面16 コンスタブルの風景画

左上はコンスタブルの風景画をモデルにしたものです。川の中に「たのしい川べ」の、カワウソとヒキガエルがいます。左ページの家はつぎのページでだいぶできあがります。中ほどの下は、ゲインズボローの風景画をモデルにしています。



ジョン・コンスタブル（1776年6月11日 - 1837年3月31日）は、19世紀のイギリスの画家です。19世紀イギリスを代表する風景画家です。この場面に描かれているのは「乾草車」1821年です。（ナショナル・ギャラリー蔵）



「たのしい川べ」はイギリス・スコットランドのケネス・グレアムの小説です。人里はなれた静かな川べで素朴な暮らしを楽しんでいるモグラ「モール（Mole）」やカワウソ「モール（Mole）」、川ねずみ「ラッティ（Ratty）」たち、わがままで好奇心旺盛なヒキガエル「トード（Mr. Toad）」など、小さな動物たちがくりひろげるほほえましい事件の数々を詩情ゆたかに描いた田園ファンタジーです。



中ほどの家は画家のトマス・ゲインズバラの《田舎家の戸口》をモデルにしているようです。本物はシンシナティ美術館に所蔵されているそうです。



## ■ 場面17 運河のある風景

中ほどの家の窓のところには「ロミオとジュリエット」がいるつもりで描いたものです。



『ロミオとジュリエット』はシェイクスピアの戯曲で恋愛悲劇です。舞台は14世紀のイタリアの都市でした。この場面に登場するのはどうしてでしょうか。

水面の高さのちがうところを船で行くときこの絵のような水門のプールを使います。下の扉をしめ、上の扉を開けて水を入れ、水面の高さが上の湖と同じになったところで、上の水門を開き船は一段登るのです。下るときはこの反対のことをします。イギリスの北部スコットランドのネス湖のあたりの湖は段差が大きいのので、このような水門がいくつもならんでいるところがあります。イギリスには、水門のある運河を航行するためにナロウボートという細長い船があります。イングランドとウェールズの狭い運河に合わせた特徴的な設計の船でイギリスの内陸部を結ぶ荷役用の交通機関として使われていました。



小説「ホーンブロワー」シリーズでは、この船で旅をする様子が描かれていました。現在は、週末の住居として使われているそうです。この場面で描かれている船は普通のボートのようです。

## ■ 場面18 ネス湖

左上はネス湖です。ネッシーという太古の怪物が今も住んでいるという伝説をつくって、その博物館のようなものが湖畔にあつたりして、観光客がきています。

ネス湖の怪獣ネッシーは一度写真に撮られ、本物かどうか



検討する暇もなく、とにかく本物になって博物館までできて、あやしげなものが陳列されていました。ばかばかしいとは思っても、はるばるきたのだから、観光客は見ています。日本でも、観光のためか、その名を言うのもはかばかしい湖の怪物を「発見した」と断固として言うところがありましたが、書くのはやめましょう。



木陰に隠れて、貴族の馬車をねらう追いはぎがいます。英語でハイウェイマンと言うのだと聞きました。右の森の中には「真夏の夜の夢」にでてくるロバになった人が寝ています。

『真夏の夜の夢』は、ウィリアム・シェイクスピア作の喜劇です。そこに登場する職人が真夏の夜の森で頭をロバにされてしまいます。そのロバの姿に妖精の女王が恋をしてしまうことになります。その後はハッピーエンドの喜劇です。



ハイウェイマンは日本語でいうところの追い剥ぎ（おいはぎ）のことです。幹線道路沿いにおいて旅行者や通行人を狙った強盗のことで徒歩で移動して同様の強盗を行ったフットパッドと区別され、ハイウェイマンは馬で移動した者を指すそうです。同じ泥棒でもフットパッドよりも上等な部類の犯罪者とみなされていたようです。イギリスではエリザベス朝

時代から19世紀初頭まで見られ義賊として扱われこともありました。特にロビン・フッドが有名です。次の場面に登場します。

## ■ 場面19 ロビンフッドの森

左で弓を射ているのは、ロビンフッドです。



まん中あたりで、大きい棒投げをしているのは、スコットランドの有名な力比べです。

右下はゲインズボローの絵をモデルにしたものです。

トマス・ゲインズバラ 《水飲み場》 小説のような風景画



## ■ 場面20 スコットランドの北

スコットランドの北は北極の海で、海岸は岩ばかりでした。あまりに入り組んでいて道にも迷いそうになります。こんなところで車がパンクしたら、たすけにきてもらうためにも自分の位置を説明することができないほどでした。そんな岩ばかりのところに、公衆電話があったのには感心しました。

左の端に「ドリトル先生アフリカへ行く」の場面があります。



「ドリトル先生アフリカへ行く」はヒュー・ロフティングの小説です。動物の言葉が話せるドリトル先生が、ある日、ジャングルのサルの間で広がる、おそろしい伝染病の話聞き、仲良しのオウム、子ブタ、アヒル、犬、ワニたちと、船でアフリカへむかうお話です。

## ■ 場面21 スコットランドの海岸



旅人はボートで、この国から離れていきます。海岸には、むかしの城か教会の跡があります。イギリスには、たとえば、ウェールズのティンターンの教会のように、壊れているけれども素晴らしい修道院の跡などがありました。



ティンターン修道院は12世紀にシトー修道会の修道士によって建てられたもの。現在は窓も屋根もない状態で残っています。

最後の場面に残した馬の手綱を引いた子どもがいます。誰でしょうか？



## 解説

この絵本には言葉がなく、はじめは何の説明も書いてありませんでした。わたしたちが外国の旅をしても、風景の中には何も説明はありません。でもレストランはどこか、ホテルはないか、と探せば、言葉は通じなくてもわかります。つまり、言葉の通じない自分をはじめで見知らぬ国へ行って、いろんなものを見たり聞いたりして、感じとっていくことは、その人の発見だと思います。発見をしたときは自分だけが見つけて知っているような、嬉しい気持ちになれるものです。

大村はま先生という有名な国語の先生がありました。その先生がこの絵本を使って授業していると、「先生!ここに不思議の国のアリスがいるよ」と教えてくれた子がいたので、先生は知っていたけれど、おどろいて、「まあ、よく見つけたわね。わたしは何も知らなかった」と言ったのだそうです。その子は無口な子でしたが、なんだかとても嬉しそうで、それ以来、よく口をきいてくれるようになったということでした。

ここに描いてあるものが何なのか「言葉に置き換えて知る」ために、教えてもらうよりも、自分で見つけて、考えることが大切なのです。今はわからなくても、ある時ゴッホの絵らしいものを見て、「あ!ゴッホは、「旅の絵本」を見ていたんだ」とふしぎがる日が来るかもしれないから、そのときまで、秘密にしておいてもいい、とまあ、そのように考えて、説明はしていなかったのです。

ところが、だんだん時間がたって、わたし自身が何を描いたか忘れそうになりますし、たとえば「だれだれの生家」というようなことは、わからなくてもいいけど、わたし以外に知ることができないもの、ということもあるので、記録にとどめるという意味で、説明を書くことにしました。

しかし、全部ではなくて、説明してもいいようなものだけについて書きました。このほか、たくさん見つけてもらいたいものはあります。むかしアメリカ編を見た子どもから「みんながスーパーマンがいると言うのに見つかりません。教えてくれませんか。どうか教えてください」という手紙がきました。「教えません。でも必ずいるのだから、探しなさい」と言って返事を書きました。その子が自分の目で見つけたときは、きっと嬉しかっただろうと思います。

2009年12月24日

安野 光雅